

糖尿病診療を通じた、病診連携の理想形「RC21」 各地域に広がる小人数勉強会

糖尿病患者数は未受診、予備軍も含めると1400万人に達すると言われる。今後益々の増加が予想される一方、患者の大病院への集中傾向は留まるところを知らず、病診連携は遅々として進んでいない。

ノボ ノルディスク ファーマ株式会社（以下、ノボ社）が2000年から取り組むプロジェクト「RC21 (Regional Circle)」をご存知だろうか。各地域の糖尿病専門医と開業医による小人数の勉強会を立ち上げ、その活動を後方支援しようという取り組みだ。地域単位の病診連携を確立すること、その地域全体の糖尿病治療レベルの向上を目的としている。従来から「地域医療への貢献」について全社を挙げて取り組んできたノボ社の姿勢を象徴するRC21、基本的には地域の糖尿病専門医1名が講師となり、開業医10名程度という小規模で構成される。既に全国で350の勉強会が発足、熱心な活動を展開している。この企画の担当者、ノボ社 営業推進部・日下部長と小池氏にお話を伺った。

◆地域に根ざした 「適切な病診連携」の構築

「病診連携が促進しない理由を糖尿病専門医に尋ねたところ、ご自身の治療を引き継いでいただける開業医を知らないという声を聞きました。治療が奏効、症状が安定した患者さんを開業医に逆紹介できれば、専門医は合併症等の症状が進行している別の患者さんを診ることに集中できる。地域単位で専門医と開業医の診療の役割を明確にし、適切な連携の枠組みづくりこそが糖尿病患者さん全体の幸せにつながるのではないか、こういった発想がRC21の原点になっています」ノボ社 営業推進部・日下部長はこう語る。「RC21最大の特徴は、地域の糖尿病専門医が日々、実践している治療方法を開業医の先生方に学んでいただく機会を創出しているという点です。専門医から逆紹介されてきた患者さんを継続的にフォローできる開業医が増加すれば、地域ぐるみで適切な病診連携が実現できると考えます」。地域の専門医の診療スタイルを開業医に伝授し、地域ぐるみで糖尿病診療スキルを向上させよう、というユニークな連携関係の構築をRC21は目指している。

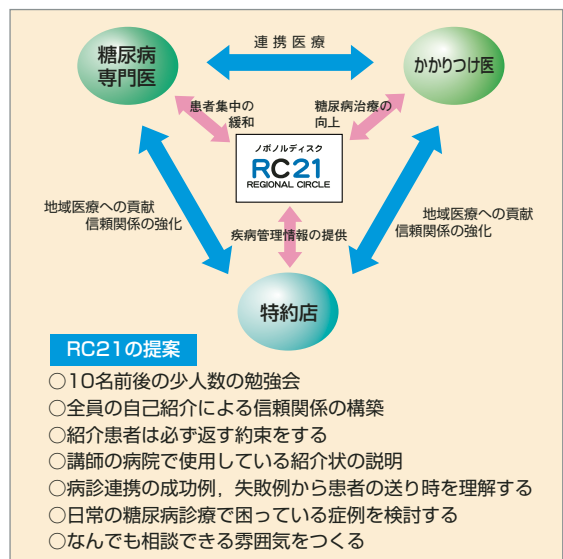


日下健児部長

おける悩みや素朴な質問ができる雰囲気が出来上がっています」小池氏はこう語る。この小人数というのはRC21の基本コンセプトのひとつ（図参照）。他にも自社製品のPRはしない、など純粋な糖尿病勉強会を保持するための運営方針が既定される。会終了後には担当MRがレーダーチャートを作成、本社に報告。会の品質保持にも配慮している。



小池真也氏



◆face-to-faceで会を運営、 個人レベルの信頼関係を構築する

開業医の糖尿病診療スキルのボトムアップが求められる一方、専門医と開業医がお互いの顔を知らない、という単純な理由も連携促進の障害になっている。この問題についてもRC21に解決の糸口が見い出せそうだ。「10人程度の小人数が会の基本となっており、どの勉強会でも参加医師間に信頼関係が築かれ、日常診療に

約2500人と言われる日本糖尿病学会認定の糖尿病専門医。そこには2500通りの診療スタイルがあるはずだ。地域の専門医の個性、特性をface-to-faceで学ぶというこのRC21の発想は、連携体制構築のひとつの理想形であろう。ノボ社では今年中には全国トータルで500のサークルを立ち上げる予定という。継続的に、各地域の医師にRC21への参加を呼びかけるそうだ。本誌では今号より、各地のサークルを2つずつご紹介していく。